

堂々開業し居りたる大丸呉服店の專屬裁縫師となった、其後伊藤呉服店（松阪屋）より專屬店の交渉ありたるも小心短氣が障り、即ち氣儘の爲め折角の交渉も斷つた、又其の人と成りの一端を示せば趣味は将棋、笛等で将棋は仲々強く田舎初段位は指せたる由である、又年中早起の習慣ありて未明に起きて小林町在祖先の墓地へ參詣したり、東別院に參拜したり惑ひは枇杷島迄供花を買求めに行つたり實に一寸普通の人と掛離れた性格の持主であった、同時に政談演説、佛教演説等の聴取を格別好み家業を等閑に附する事などありて著者の幼時家庭で紛叫を聞いた記憶がある。父忠平には著者、清道、信行の三男と千代と云ふ一女並に後妻との間に一女とがあつた、兎も角父は一寸名人氣質と云ふ可なり奇行が多かつた様である、明治三十五年九月二十六日著者二十一才の時に四十六才を一期に大往生せり。母はかきと稱し、野田善助の次女にして東區赤塚より嫁入し、明治三十三年十二月八日著者十九才の時胃腸病の爲四十四才にて長逝す。

著者加藤清吉は明治十五年十月十八日桑名町三丁目に於て藤三郎（忠平）の長男として出生す。

幼 年 時 代

幼い頃の想ひ出は限りなく懐しまれる、そして私の腦裡を走馬燈の様に急がしく、幻燈繪の如く薄ボンヤリと去來する、急湍斬巖を切り拓く態の思ひ出や、温水柳下に澄むが如き和風のどかな思ひ出など盡くるところを知らない、主だった追憶の二、三を拾ってみよう。

春は父の背に乗って

明治二十年 六才の頃

感慨無量の四字に盡きるが、自分が物心ついた頃の記憶を辿つて春日遊山でもなく、參詣でもなく、熱田の宮まで浮れ出た當時の模様を紋景すれば、當時小田原町の宅から父親の背に負はれて徒歩で出掛けたものである、乗物などには餘程の贅澤な家庭でなくては乗らず、普通の家庭では非常の場合以外には乗らなかつたものである、父の背に乗って町から街への移り變わりをのんびり眺めつゝ行く行くに當時は名古屋も板葺の上に拳大から南

瓜位迄の石を置いたものが多く、時たま相當な建築物で瓦屋根を見受けた位のもので、電柱や電線などは殆んど見當らなかつた。小田原町から東廣見（現在の下前津）へ出るとその近所は富士見坂と云ひ快晴の日には遠く富嶽を望見する事が出来たのであって、此等の名があつたもので、東廣見から東一帯は一望のもとに畑や田で遠く御器所を望み白い木綿を晒したのが点々と見受けられた。

「編者附記」明治二十二年に出版された庵原小金吾の著作になる、名古屋史談 に依ると、

東別院は下茶屋町にあり殆ど八十年程前に建築せしものなり市内第一の巨利にして北金城とその宏壯を競ふに似たり、古昔織田信秀の築きし古渡城といふは此の地なりと傳ふ、境内櫻樹數十株あり春風駘蕩の候には賞遊の貴賤群集す、其東門を出づれば田圃相連り遙に三遠の諸山を望む風景甚だ佳なり俗に廣見と云ふ。

とあって、全く境内の櫻花咲き競ふ頃は仲々文學通りの佳景であつた、東別院より南に高蔵の森、熱田の森が見え、名古屋街道といふ筋をこの二つの森を目標にテクテクと歩き宮へ着いたものである、畏れ多い事であるが、當時の熱田神宮は現在に比べて荒廢し手入れなども不行届きがちであつた、神社の建築様式も現在の如くではなかつた様である。参拝

を終つて歸路には本町通りを大須に向けて馬車に乗つたもので途中一、二ヶ所並木すらあつた、大須の現在の東入口に駐車場があり、こゝで下車して觀音に參詣して桑名町を北進して歸宅したのである。

これより先き明治十九年著者五才の時に現笹島貨物驛の前進たる名古屋停車場が設立されて居り、株式取引所も十九年に設置されたのである。

この當時は電柱、電線などの障碍物がなかつたので軒下から風揚げが出来た、それ位現在から見ると閑静且つ殺風景なものであつた。

現今の柳橋、泥江橋及び舊名古屋驛、現名古屋驛との一帯の間には建物と云つては二、三軒点々散在してゐたに過ぎず、江川の東には家並があつたが、江川を堺ひに西は殆ど田畑で、草ぼうぼうの廣っ原であつた、その中にポツンと名古屋驛が建つており、おそまつ極まる景色であつた、驛前には池があり、子供は此の池でよく泳いだもので、鐵道用木材が貯材してあり、附近には僅かに鐵道局用の小屋が二、三見受けられたのみで、只今の東洋一を誇る新名古屋驛と比較して誠に今昔の感に堪へない次第である。

オカツパと小遣錢

當時の小兒はすべて「オカツパ」であつて小遣錢を戴くにも天保錢「八里」は餘程の事がないと與へられず、普通は文久錢又は二里錢で、當時はそれで芋や饅頭が充分買へたものである。まづ宮詣り（熱田神宮詣り）と云ふと五錢頂戴して、それで往復何やかとたらふく費つて尙ほ馬車にも乗れたのである。

當時の物價の一例をあげてみると、

田舎饅頭	一厘
(上等もの)	二厘
うどん	八厘
學校月謝	一ヶ月 四錢(天保錢五枚)
散髪	三錢五厘
米一圓に付	明治廿三年頃 一斗五升

同四十二年頃

八升

五錢の小遣ひを頂戴して宮詣りに行けた著者は幸福しあはせな有難い次第であつた。

列をなして電柱に耳を當る

明治二十一、三年 著者八、九才の時

明治二十二年十月には自治制に依つて名古屋市と改めらる、それ迄は明治十一年制定の郡區制に依つて、名古屋區と稱し、全区を二十五部に分ち、毎部に役場を建て戸長を置き之を區長が統治してゐたのであつて、市制施行と共に初代市長には中村修氏が就任された現明倫中學校は既に此の年に設立され、武揚學校と稱呼した。

尙ほ又明治二十二年は國家的に觀て實に銘記すべき年であつた、主だつた政治、經濟狀勢を示せば即ち二月十一日憲法發布せられ、同時に皇室典範、議院法、衆議院議員選舉法貴族員會、會計法(會計法は廿三年四月より實施)等公布せられた、時の内閣總理大臣は黒田清隆であつた。此の日文部大臣森有禮 西野文太郎に刺殺された、同年十月十八日外務大臣大隈重信 來島恆喜に爆彈を投ぜられ、重傷、其結果條約改正は中止となる、十一月三

日には皇子嘉仁親王立太子被遊、又七月には東海道線東京神戸間全通、新橋神戸間毎日一回往復直通列車の運轉を開始、依つて名古屋に於て鐵道一千哩祝賀會が開かれ（當時の國有鐵道五五一哩、私設鐵道六七一哩、計一、二二二哩）市制施行、鐵道祝賀會等で上を下への大騒ぎであつた、加え明治十七年頃の不況から上昇氣運にあつた景氣が廿年頃より著しくなり、漸く頂點に達した年で、株式市場は沸騰し、出來高二百十萬株を越す勢ひを示し、諸會社の増資及新設資本金七千二百萬圓で明治十九年の十倍の力が示現された、之等は何れも鐵道熱より發生した企業熱のしからしむる處であつた、一方米作は凶作で收穫高三千三百萬石に達せず明治十七年の凶作に等しく、工業及び商業界の好況に援けられて先づ無難狀況であつた、が此の反動は翌二十三年に至つて恐慌襲來となつて顯れ、日銀に五百萬圓を限度とする制限外發行が三月初旬認可された程である。兎も角二十二年の景氣は大したもの子供心にも人心は極めて浮調、遊山、花見と絢爛たる繪巻物然たる有様を見受けたのである。閑話休題。

二十三年と記憶するが初めて島田町と入江町の北東角に發電所が設けられアーク燈が本社前（入江町現在五月本店前、現在の五月本店の場所は當時牧場であつた）と廣小路本町中央、本町四丁目（現御幸本町）大丸前等に點火された、それが珍しく大勢の見物人が押し掛けたもので、燈火其ものも不思議に感じたが電柱に耳を當ると音がすると云ふので老幼男女大勢列をなしてその電柱に耳をあて、「ゴオーゴオー」と云ふ唸り聲を聞いたのであつて誠に面白く、且つ珍風景であつたが當時は不思議に對する好奇心で一杯だからこんな長閑な風景を創り出したのである。

四季行樂の情景

明治中葉 著者八才前後の頃

春秋の行樂時期に町内又は組内のものが集つて遊山に出掛けた時の情景は、神樂町地先から鳴物入りで、川名又は八琴山（現八事山）或ひは大池（現大池町、商工會議所附近）等へ春は花見、秋は月見と面白おかしく一日の清遊を試みたもので、八琴の邊りは現在より尚ほ一層雅びやかであつたと共に詩味に富み、附近の風物大いに野趣汪溢してゐた様で手頃な遊び場所であつた、大池の邊りはその名の示す如く大きな池があり、池邊には櫻樹が植へられて美觀を添へ、池の周圍を圍く馬場がしつらへられて時々草競馬が都人士を集

めて盛んな賑いを見せたものである。一方又現在の堀川も當時は河水極めて清澄で、梅、櫻のどくいが兩堤に競い咲いて、まだ松飾りの取れて間もない初春には、瓢ひょうを腰に堀川の梅見も亦格別と古渡りか、山王へのそぞろ歩きを試みた風流人の姿も見られ、花の三月には朝日橋の櫻を賞で或ひは日置橋より北へ西主水町邊り迄の櫻樹に春の楽しみを満喫し、水に舟を浮べる人あり、陸に花辯の許に和歌、俳諧に、唄、三絃に浮れる人もあつて一日の歡樂郷として申分のない場所柄でもあつた、山王のあたりから西へ菜の花一面の田圃面とんもつら遠く北勢の山連やまづれをながめつつ庄内川のおくし摘み、これ等も一つのハイキングコースとして著者も良く遊びに連れ立つて行ったものである。夏の涼みは廣小路、榮町の柳の下に憩ひ、或ひは堀川端、江川端も格別であつた、秋の紅葉は八琴山、山王の堀川邊りが盡きせぬ眺めでありその錦繡の粧ひは古渡り、龍興時の時雨と共に和歌、俳諧の題材になつて、墨客の矢立の筆をしめさせた事であつた。陰鬱と云へばそれまでだがその時雨が一人の風情を添へた淋しい秋も過ぎ、晴れては降り、時雨では晴れた雨もいつしか音もなく白い冷いものと變る冬は、他の季節の様に盛んに出歩きもならずいろりべかこたつ檜火燵にすつこんで流行本か草双紙をつつらつら読み更ける位であつたが、都人士は雪見酒と洒落てこの雪の

日を格別楽しんだ事であらうが何分にも「オカッパ」の童への頃とて、他人の仕様を眺めてゐたにすぎない、然し記憶を辿ると八琴興正寺五重塔の雪景色、白鳥御小屋おこや（御料出張所貯木場）附近の白しろ色の絶景、特に御料地には關門が設けられてあつたが其處に、つりがねの松といふ丁度吊鐘を吊した様な形ちの松があつて堀川の上り下りに一人の風情を添へ、その外日置橋あたりの風物など今尚ほ腦裡にくつきりと浮んで來る雪景圖ありさまである。

排外思想とキリスト教

明治廿三、四、五年頃

明治廿三、四、五年頃にキリスト教と佛教との争闘時代があつた様で、町々でキリスト教に家を貸して布教が初まると貸主に迫害を加へたものである、又キリスト教々會の前に佛教の説教所を急設し盛に反撥したのであつて、甚だしい時には言論に火華を散らし石などの降る事もあつた、町通りを外人又は支那人が通行すると毛唐人といつて子供までそれを口にしながらつき歩いたもので、蛇蝎なまはの如く嫌子と共に央恐れもした、支那人には特に

チャンチャン坊主と云つて頗る排外思想を漲らせてゐた、此れは當時漸く國力が充實され對外的觀察力が向上しつゝあつた一つの變形的現れでもあつたらう。

濃尾大地震と著者

終生忘れ得ぬ思ひ出（十才）

直接、間接を問はず、我が日本國民は誰れ一人として大きな地震の經驗を持たない者はない、火山國日本として之は當然の宿命として吾々國民に負はされてゐる處であるが、地震に對する國民的覺悟が常に日本の進取的發展性に寄與してゐる事渺なしとしない。

著者の幼年時代に於ける一つの大きな事件として忘れる事の出來得ない事柄は濃尾の大震災である、明治二十四年十月二十八日著者十才の朝、學校へ登校せんとする少し前、お辯當の副食物を調理する味淋を買ひに行くのを命ぜられ、歸つて臺所へ器物を置くや否やこの大震災が襲來したのであつて、直ぐさま今の八重垣町須佐之男神社の境内へ急遽避難した、この時母は妊娠中であり既に臨月であつたからこの異變のために驚愕、精神的の大

衝動を受けて震災と同時にこの避難所に於て産氣つき男子を出産されたのである、それが實弟清道である、この避難所に於ける實母出産當時の混雜振りは今尚ほその狀況が眼前に髣髴たるものがある。

この時面白い事は此の避難所に於て尚ほ他に一人出産した人があつたが如何なる誤りか当時の新聞號外に忠平の妻避難所に於て双生兒を産み、母子共健全などといふ記事があつて、震災に逢つた悲しみの内にも僅かに喜び合つたものである、この號外と共に見舞の者やら、見物人でその雑沓は之れ又言語に絶し遂に警官の出張あり、護衛的警戒の上で群集を追拂つたものであり、外國人の如きはこの事を聞き同情と喜びの金品をかなり澤山提供されたのを記憶してゐる、大震災の狀況は他に記録も種々あるが、この混亂と悲惨な有様は事實に當面したものとして實に忘れ難い思ひ出となつてゐる、その間加藤一家は別に負傷者もなく生まれた兒も無事にて益々世の同情を受けたのである。

乍然著者に一人の妹があつて千代と云ひ當年六才であつたが性來虛弱であり既に臥牀中なりし處如斯大震災に遭遇し、加ふるに寒さ加はる神社内の假住宅と醫療意の如くならず

遂に二十四年十一月十九日に逝去せるは誠に痛恨事であった。

學業の事

當時の教育界の狀勢は無論現代とは雲泥の差で、上級學校へ進む者は極めて少數で、高等小學校へ進む者すら町内に一、二名と云う有様であつたから、大部分は小學校だけ卒業すればそれで事足りたとして家業に従事せしめられたのである、著者は六才の時櫻ノ町通伏見町角の志村塾へ午前中は習字に午後は和泉町の増田塾へ漢學の勉強へ通つた、當時は勿論教科書なく全く空讀であつた、その頃の事として學校の先生は成績優良惑ひは裕福な家庭を訪問して將來の學問の必要と欧米先進國の例をひいて上級學校へ進學方を奨めて廻つたのであるが、それでも仲々上級學校へ進む者は稀であつた、著者の家庭も裕福ではなかつたが著者の小學校の成績に依り上級學校へ進み得ると云ふので再三先生の奨めを受けたがその必要なしと云ふので明治二十五年三月明倫尋常小學校を卒業、同二十八年三月名古屋市立第一高等小學校を修業したのみである。上級學校へ行き得たものをそれが出來ず、今日至つて常々學問の素養のない事を誠に遺憾に思ふ次第である。

少年時代

著者濱木屋へ奉公に上る

木材界へ身を處する第一歩

明治二十七年十二月十五日（十三才）

物情騷然、既に六月四日には日清戦争の序幕たる朝鮮への出兵があり、七月廿五日には豊島沖の海戦が行なはれて、八月一日遂に對清宣戦が布告され、越へて九月十三日大轟を廣島に進ませ給ふの事あり、世は挙げて非常時氣分旺盛する師走十五日、著者の一生を託する木材界への第一歩を印したのである。同じ十二日には第二回限外發行施工せられて、戦事豫算案實施に伴ふ財界定策が構ぜられた。

著者は十五日未明、氏神様に詣でて決心を固め、父母に別れを告げて當時西區木挽町四丁目にありし濱木屋へ上前津の住加藤市蔵と云ふ親戚の人につれられて丁稚奉公に上る、